

本紙の次解

特246

やりに延何

620

河相達夫 省務外



青年日本運動

河相達夫

青年日本運動



0009732000

0009732-000

特246-620

事変解決の根本は何処にありや

河相達夫・述

青年日本運動

昭和14

ABJ

本紙の次解更

95

特246

620

やりに處何

口述 河相達夫 省務外
長部報情



青年日本運動
バンフレット第一輯

の外見會と國者記人外
長部報情相河

行刊動運本國年青

特246
620

「青年日本運動」パンフレット第一輯發行に就て

今度、外務省情報部長、河相達夫先生の目比谷松本樓に於ける講演速記を先輩笠木良明先生の幹旋に仍り我が青年日本運動に於て頂戴し「パンフレット」第一輯として發行し、全國の青年學校、在郷軍人、青年團、各學校及び其他の機關に進呈する事にした。全國的に配布するには部数僅かに拾萬部に過ぎず、然し我々は目下此れで最大限の努力である、従つて拾萬のパンフレットは百萬にも千萬にも活かして讀んで貰はねばならぬ。讀者は讀後必ず友人より友人に廻讀さして貰ひ度い、現實の日本は一枚の紙片でも無駄にせざる事を要求して居る。尙、事情の許す人は郵送費を三錢切手を以て本部に送つて貰ひ度い、勿論其れは事情の許す人のみに希望する事である、然し其の位の眞心の無い人は此の書を讀む資格無しとも謂へる。

それから冊子發行の意義は此れに仍つて少くも世界勢と、日本を中心にして將に躍動しつゝある東洋の現狀に就いて各々が正しい認識を持つて貰ひ度い事にある。

最後に稿を頂戴した河相達夫先生、同じく幹旋の勞をとられた笠木良明先生、及び發行に際して不肖を支援し下された多くの先輩に對し心から御禮を申上げる次第である。

昭和十三年十二月

「青年日本運動」中央代表者 兒玉譽士夫

講演中の河相達夫氏



— 内容目次 —

- 一、 廣東陥落の意義……………一
- 二、 支那の新生……………三
- 三、 外交の原則……………五
- 四、 米大陸新體制……………八
- 五、 アメリカ大陸新體制……………三
- 六、 平天下の理想歐洲の新體制……………五
- 七、 伊太利の新興……………一七
- 八、 英佛の態度……………二三
- 九、 提唱せられたる歐羅巴聯盟……………二五
- 一〇 亞細亞新體制的原理と南州翁の遺教……………二七
- 一一 日本精神の原理……………三〇
- 一二 支那事變解決の道……………三三
- 一三 平等互尊の原則……………三五



事變解決の根本は何處にありや

河 相 達 夫 氏

一、廣東陷落の意義

只今御紹介を頂いた河相であります。暫く御清聴を煩はしたいと存じます。

廣東の陥落に引續いて、武漢政府の根城である漢口も遂に陥落致しました。廣東は、皆様も御承知の如く、南支那に於ける隨一の重鎮であります。廣東の街を貫いて居る珠江といふ河から吐き出した泥が、段々たまつて出来上つてまいりました三角州があります、其の廣さは三千平方哩ありますが、支那は廣東を失ふことに依つて此の廣い「デルタ」を失つたことになるのであります。私は、廣東に二年ばかり在勤して居りましたので、此の地方のことは少しく承知致して居りますが、一年の内、四月の中頃から十一月の中頃までは眞夏であります。即ち、一年の内七箇月は夏であります。南方の輝く強い太陽の光が、七箇月の間、燦々と地上に降り注いで居る。さうして雨量は非常に豊富であります。そこで、此の三千平方哩の平野には作物が誠によく出来ます。米を二作と、麥又は雜穀を一作、一年に三作することが出来るのであります。英吉利

が支那から奪ひ取つた香港、此の香港の繁昌は全く此の三千平方哩の沃野に據つて居る譯であります。之を支那は失つたのであります。

それのみならず、新聞等で御承知のやうに、漢口政權が外國から武器を入れる徑路に、香港から廣東に出て更に粵漢線で漢口に運ぶ路と、佛領印度支那の河内から廣西省龍州を通り、さうして廣西の首府南寧に出て、更に佳林を経て湖南省に入つて漢口に輸送する路と、又、河内から雲南省の首府昆明に輸送し、昆明より貴州省を通つて湖南省に入る路、更に英領「ビルマ」から雲南省に輸送し、雲南省より漢口に送る路と西比利亞鐵道の「トルクシブ」線に依つて新疆省の西まで持つて参りまして、河筋を傳つて新疆に入れ、哈密を経て蘭州に送る路があるのであります。之等の輸送路中、香港に輸入し廣東を經由して漢口へ送られて居つた此の路が最も重要であつたのであります。此の輸送路を失つたのであります。そこで、武漢を失ひ此の輸送路を失つたといふことは、軍事的にも政治的にも、また精神的にも、非常に大きな打撃を支那に與へた結果になつて居るのであります。更に只今「サイレン」に依つて知らされました如く漢口の陥落を見たのであります。私、今日「モーニング」を着て参りましたが、實を申せば、皆様に敬意を表することよりも、祝賀に宮中へ参内致したいと考へて、一着に及んで参つたやうな次第であります。又上海に於ては既に陸海軍報道部から發表され、實は今か々と待つて居りました。若し「サイレン」が鳴らなければ、甚だ非合法ではありませうが、皆様に御披露申上げたいと思つて参つたやうな次第であります。

左様な次第で、蒋介石政權が非常な苦境に立つたことは疑ひないのであります。然らば、蒋介石政權は、參つたと手を舉げるかどうかと云ふ事でありませう。恐らく、今後、大きな戦闘は出来ないのでありませう。又蒋介石政權の、あの相當規模の政府を維持して行くべき都會は漢口廣東以外には無いので、維持することも困難でありませう。左様なことから、大きな政府の維持並に大きな規模の戦争は、殆ど考へられないのであります。それならば、之れで以つて完全に降参して来るか、假りに降参したとすればそれで萬事此の問題は解決するかと云ふことが、今後大きな問題であります。

二、支那の新生

よく、支那に詳しい方々が、支那は一匹の蚯蚓のやうな物だと申します。蚯蚓は、幾つに断つても、其の一つ宛の切れはしが一つ宛の存在として生きて行く、支那が其の通りだ、支那を幾つに割つても其の部分々に生命があり、一つづつの生き物として生きて行く、斯う譬へる方が多い。又、嘗て、肅親王は、支那は恰も砂のやうな物である、砂は實在して居るには違ひない、併しながら、砂には固定的な形がない、圓い器に盛れば圓くなり、それを覆へせば散亂する、存在して居ることは間違ひないが形がない。而も、砂と砂との間には、之を繋ぐべき何等の粘着力もない。斯う云ふ風な意味で、「支那ハ散砂ノ如シ」と申されたのであります。之も、多くの人が支那を説明する時に用ゐられる言葉であります。

然らば、支那は何時までも散らばつた砂であるか、何時までも蚯蚓であるかと申しますと、之は大きな問題だか、支那とても何時迄も昔のまゝの支那ではない、山芋でも化けて鰻になる。蚯蚓が、だんだん生長して鰻になつた、雲を呼び風を起して龍になるかどうかは知らんが、支那にも、亦、一つの新しい生命が生れつつある。支那に一つの中樞神經が出来つつある、それが強烈なものであるかどうかと云ふことに就ては色々議論もありませう、併しながら、兎に角、中樞神經が出来つつあつて、高等動物になつて來つつある、即ち、支那人に、民族意識、國家觀念が段々發生して來た、之は掩ふべからざる事實であります。それに付て詳しく申上げて居りますと、私の本論に入る餘裕が無くなるので、別の機會に譲りたいと思ひますが、兎に角、支那の人々、殊に若い人々の中に、強烈な國家觀念、民族意識が發生して來たことは間違ひないのであります。然らば、何が中樞神經を成して居るかと申しますと、蒋介石唯一人の人間ではない、蒋介石を繞つて彼を頭領と仰ぎ、又、蒋介石に依つて哺まれた所の黄埔軍官學校卒業生の或る分子に依つて結成された一つの團體、それが中樞神經であります。其の主要なる會員數は約一萬人、彼等の擔當して居る職務は、中央軍の幹部軍團長、師團長、旅團長、或は聯隊長と云つたやうな連中でありませう。年齢は三十歳から四十歳がらみの若い連中でありませう。

此の連中に依つて結社された團體の名前は、藍衣社であります。支那の百姓は藍色の着物を着て居ります。藍色の衣の社であります。此の連中に付て詳しく申上げる時間はありませんが、其の一斑を申しますと、其

の入社の資格は、権利を言はず犠牲を厭はず、何ん時と雖も兵となる、一日十二時間以上の労働に服し得ること等々であります。権利を言はず、犠牲を厭はず、之は單純な口頭禪ではないのであります。私は之等の人と若干の附合をして居りますが、これは孫文の提唱した三民主義の一つの民権と云ふものとは凡そ大分懸け離れた思想であります。権利を言はず犠牲を厭はずと云つたことを中心とした一つの結社だと御考へ下されば、御分りだらうと思ふのであります。

三、外交の原則と世界の大勢

外交のことは難しく申し上げなくても、極めて單純なものであります。恰も、皆様が、社會人として社會に處して居られる場合の、個人と個人との關係、それを國と國との關係に引直してお考へになれば分ると思ひます。沈香も焚かず屁もひらず、世の中に顔も出さないで居れば附合ひはない、國も同じことであります。そこに、何等か、國家としての成る使命を感じ、ちつとして居れない、又、國家として其の存立が危くなる、他から亡ぼされるのを甘んじて待つ譯に行かないと言つたやうな或る何かを求めるといふ氣持が國家に起る時、そこに他との交渉が起つて来る、これが即ち外交であります。皆様が日常社會に生きて行かれる時、先づ、第一に、自分を識らなければならぬ、又、相手がどんな人かを識らなければならぬ、さうして、世の中といふものは一體どんなものかといふことに付ても、十分な知識なり、又、色々と御苦勞の結果或る一つ

の社會觀といふものをお持ちになり、それで初めて世の中に處して居られるのである。國家の外交も同じ事であります。或る國と關係が起つて来た場合には、相手の國はどんなものか、又、世界の情勢はどうか、さうして自分の國は何を求めんとし、何を爲さんとして居るか、斯ういふ點を明かにして、そこに初めて外交政策の根本基調といふものが生れる。只今、日本は支那と大戦争をやつて居ります。これは事變であつて戦争に非ずなどとは詭辯である、全くの戦争であるが、何の爲に此の大戦争をやつて居るか、又、どうして之を解決するかといふことに付て、少しく卑見を申述べて見たいと思ひます。

凡そ、人間社會のことは、何事に依らず、或る統一状態が起つて、さうして、其の統一状態が月並みになり、生命を失つて来ると、分裂が始まるのであります。さうして、分裂した状態が、どうしても満足すべき結果を國家、民人、社會に與へないといふと、其の分裂が段々統一へと向いて来る、この原則は、人類の社會生活に、國家生活に、又、其の國家を集めた國際生活に、同じやうに働いて居るのであります。分裂より統一へ、統一より分裂へ、又統一へと、幾多、波のやうな線を描いて、眞の統一への道を求むることが、人類に與へられた使命であり、其起伏が幾多歴史上の事實を形作つて居るのであります。

然らば、現在の世界はごつちの方に向いて居るかと申しますと、分散より統一への反省と實踐の氣運に満ちてゐるのであります。歐羅巴戦争の後に國際聯盟が樹立せられた。國際聯盟は、集團保障制といふゆきかたをする一つの機構を通して、世界政治の中央集權的に行はうといふ目的から編み出されたものであります。

これは御承知の如く當時の亞米利加大統領であつた「ウイルソン」の提唱したものでありますが、要するに世界の一大勢が、「ウイルソン」を驅つて國際聯盟を提唱させたのであります。併しながら、此の國際聯盟には、成立の當初から無理があります。唯、法律的な束縛に依つて、世界の國々を一纏めにしようといふ無理があつたのであります。そこには、人情に副はないものがある。又精神的な、道義的な結束を缺いて居る。全然缺いて居つた譯ではないが、極く大掴みに言ふと、さういふ缺點を有つて居る、そこで亞米利加自身が最初から入つて居らない、斯様な譯で、一旦出來ても、媾和した限り敵も味方もない筈であるが、獨逸と奧太利は入れない、又入つて來た國々の間でも大國と小國といふ、利益を中心とした二つの相反する黨派が出來た、加之、其運用を誤つた、斯ういふ風なことが原因になつて、僅か二十年ばかりの間に、次第に生命を失つて來て、今日では、最早、お陀佛も同然な姿になつて居る。先般の「ブラッセル」會議に於て、日本を裁こうとしたに對して、日本政府が之を拒絶したが、拒絶しても何も出來ない。又、最近、御承知のやうに、聯盟規約第十六條の發動を決議致しました。併し、それに參加して居る國々を一つ一つ打診して見ますと、どの國も制裁を單獨で加へようといふ氣持は動いて居ないと云つた次第で、完全に潰滅に歸したのであります。

此の聯盟が次第に國際政治の實現といふことから遠ざかつて行くと同時に、世界殊に歐羅巴に於ては、國家主義が強烈に頭をもち上げて來たのであります。國際主義が弱まつて國家主義が擡頭した。各國間で關稅の障壁を高くして、貿易戰が行はれ、利害關係の相反することから、各國間の鬭争は日に激烈となつて來た

のであります。國家主義が擡頭して國際主義が衰へると言へば、今言つた世界の一大勢とは相反するぢやないかとお考へになると思ひますが、これは、國際聯盟及びその政治思想が、眞の世界政治指導機關及び觀念でなかつたといふ一つの反動にしか過ぎなかつたのであります。世界の一大勢は、依然として、分散から統合へといふ傾向を辿つて參つて居ります。其の統合への大きな形勢に乗つて、最も顯著な成績を擧げて居りますのは、亞米利加合衆國であります。

四、米大陸の新體制

(イ)米國の外交

皆様も御承知のやうに、亞米利加合衆國の建國の精神は何であるかと申しますと、それは、「デモクラシー」であります。「デモクラシー」といふものに依つて、夫婦の關係が出來、親子の關係が出來、社會の結合、國家の結合が出來、國と國との聯邦の結合が出來、そこに、今日の亞米利加合衆國といふものがある譯であります。さうして、其の亞米利加合衆國は、今や、此の「デモクラシー」を根本精神として外交を亞米利加大陸の各國に向つて行つて居り、それに依つて、亞米利加大陸を打つて一丸とする一つの體制に作り上げようといふ事業を、著々として完成しつつあるのであります。「デモクラシー」が亞米利加建國の根本精神であるとするならば、其の精神を以て外交を行ふことは、即ち、之れ國體を明徴にする外交であります。これこそ

本當の國體明徴外交と云ふべきでありませう。

亞米利加の内政にも、外交にも何等矛盾のない一貫した一つの根本精神がそこにあるといふことを、深く注意を要すると思ふのであります。兎角、外交といふものは何か内政とは別なものといふ感じが、多くの人の頭にありますが、何等異なる所はない、内政も外交も其根本原理は同じであります。嘗て、勝海舟先生は「末に於けるあの困難なる外交を取扱はれて深い經驗を持つて居られますが、其の經驗が言はせた結論は何か、「外交の秘訣は誠意に在り、」斯ういふ一つの言葉であつたのであります。外交の秘訣は誠意に在り、それ以外何物もない、智識でも何でもありません。斯ういふのであります。そこで、亞米利加はどんなことをやつて居るかと申しますと、皆様御承知のやうに、亞米利加には「モンロー」主義といふものがある。當時の亞米利加と致しましては、また國力も十分でないのに、亞米利加諸國のことに付て歐羅巴から彼此れと差出がましい干渉をされるのは承知出来ないといふ趣旨が、此の「モンロー」主義であります。其の「モンロー」主義が次第々に展開して参りまして、十九世紀の末に、初めて、亞米利加合衆國の國務長官即ち外務大臣が、華盛頓に全米會議を招集したのであります。それから今日までに七回、其の會議が行はれて居りますが、最初の程は、何と云つても、亞米利加合衆國が大将で、他の國々にものを強いるといふ傾向があつて、集まりもよくなかつた。所が、最近では、餘程狀況が變つて参りました。一昨年十二月一日から「ヴェノス・アイレス」に於て、約三週間、此の會議が開かれたが、其の時には、汎米でなく、米國間相互の會議（「インター・アメ



昭和十一年十二月一日ブエノス・アイレスにおけるインター・アメリカ會議開會式 立てるはルーズヴェルト大統領

リカン・コンファレンス」といふ文字を使つて居ります。大統領は巡洋艦に乗つて威勢よく乗込み、國務長官「ハル」は、國務省の主要な官吏數人を連れて出席致して居ります。此の會議には、全米二十一箇國の代表者が集まり、六十幾つの決議を通過致して居ります。其會議の初めに、各國の内政に干渉しない、各國の間に平等・互恵・互讓といふ原則を確認する、而して、此の各國の間に、全體的な一つの繋がり、連帶性を確認する、斯ういつたやうな原則的決議を通過致しました後、全米二十一箇國の間にのみ適用のある一つの國際法を採用致して居ります。何しろ國際法といふものは、近頃の世界の實勢と段々合はない點が出来て來る、亞米利加が幾ら聲を囁らして國際法の原則を叫んで見ても、通用しない。昨年七月蘆溝橋事件の直後二週間ばかりして、「ハル」國務長官は、亞米利加外交の根本基調として十四原則を各國に通牒致して居ります。其の中にも國際法の問題が入つて居ります。世界に於ける國際法を取戻さなければならぬ、斯う申して居ります。それを別に致しまして、此の全亞

米利加の各國の間に適用せらるる國際法の採擇を致して居ります。又本年の暮には、「リマ」に於て同じやうな會議が行はれ、其の會議には、此の國際法の外に、亞米利加の各國間で起つた問題を片付ける國際司法裁判所の問題が再び提起せられると思ひます。其の外に既に採用されたものには、此の亞米利加の各國の間では關稅を上げないことにしようぢやないかといふこと、即ち關稅休日が定められ、更に、財政が困難になつた國が出来たとすればお互ひその整理に力を貸さうぢやないかといつたやうなことが行はれ、さうして、其の結果と致しまして、既に着手せられて居つた譯であります。が、「アラスカ」の北端から西海岸を加奈陀の「ブリテイッシュ、コロンビア」洲、それから亞米利加の各州、墨西哥、中米、南米の各國といふ風に走つて南米の南端まで北、中、南三米を貫く一本の自動車道路を作るといふことが、此の會議に依つて採擇せられ、工事は既にほとんど進みまして、完全にこれが出来ました。此の一本の自動車道路は、極めて簡單一つの旅券さへ持つて居れば、「アラスカ」の端から南米の南端まで、何等の故障なく、何人とも旅行が出来るといふ風になつて居ります。又、東海岸の方面に於ても、陸路又は海路を繋いだ同じやうな國際交通路が次第に完成しつゝあるのであります。飛行機に依る各國間の交通も亦然りであります。斯の如くにして、國の存在は尊重せられ、其の主權も尊重せられ、而して、其の國の上にもう一つ出来た一つの超國家的な政治組織といふものが、次第に完成せられつつあるのであります。これが亞米利加大陸の現状であります。

五、アメリカ大陸新體制

(ロ) 米國と墨西哥の關係

御承知の墨西哥は、中米に於ける一等大きな國であり、富源の豊かな國であります。其の墨西哥の石油の八割といふものは亞米利加人が持つて居るのであります。あとの二割を大部分英吉利人が持つて居るのであります。墨西哥人は幾ら持つて居るかといふと、全體の三分か四分しか持つて居ない。一つの國が在つて、さうして、亞米利加から獨立を保障せられ、平等にお付合をしますと云はれて、その國の大事な資源の三分か四分しか其の國が持つて居ないといふのは不合理であります。墨西哥人が、まだ整頓しない政治組織、政治權力の下に在りながら、此の石油資源を自分の國に取上げたいといふ希望を持つことも、一應無理からぬ理由があると思はれます。そこで、此の石油資源の全部を政府に取上げるといふので、先般、公用徴收を致しました。さうすると、亞米利加は、自分の國民が八割を持つて居るものを取られてしまふのでどういふ態度に出るか、英吉利はどういふ態度に出るかと申しますに、英吉利は、どうしても墨西哥はそれを強行するといふ見据がつくまで抗議を屢々致しましたが、最後に、お前さんの方で取上げて、其の石油の一手賣權を英吉利に渡して貰ひたいといふ交渉をしたのであります。ところが、墨西哥は、それを肯かない、そこで、とうとう國交斷絶といふことになつた。然らば亞米利加はどうしたかと申しますと、ちつと指をくわ

へて見てゐるわけではないが、「ハル」國務長官は、凡そ外國に在る亞米利加の權益は其の國の法律に従ふべし、若し損害を受けた場合には賠償を得べしといふやうなことを言つて居る。亞米利加は、嘗ては、墨西哥に對して屢々出兵して居り、亞米利加人が墨西哥で仕事をしようとする、「ピストル」を下げていなければ仕事が出来ないといふ状況であつた。ところが、「モーロー」といふ大使が數年前に参りまして此の形勢を一變致しました後、亞米利加の對墨西哥政策は非常な轉換を致して居ります。其の結果、今日では、墨西哥は非常な親米主義になつて居る、其の亞米利加が、墨西哥に對して何等の政治上の壓力も加へない、出兵もしないといふやうにやつて居る。それが、墨西哥の石油問題に對する亞米利加合衆國の態度であります。然らばこれはどういふ風な意味合を今後生んで来るか、全米を打つて一丸としようといふ亞米利加の理想にどういふ關係を持つて来るか、非常に注意を要する問題だと思ふのであります。

(ハ) 米國とカナダの關係

次に亞米利加の北にあり、日本全土の十四倍もある英領加奈陀と亞米利加合衆國との關係はどうか。私は嘗て、加奈陀「ヴァンクーバー」で領事を致したことがあります、加奈陀人は亞米利加人を嫌ふ、又、亞米利加人は加奈陀人を馬鹿にする、同じ一弗の金でも、亞米利加の方は加奈陀より五六「セント」低い。ところが、禁酒法時代に大勢酒を飲み、國境を越して自動車をやつて来る、其の連中が酒を飲んで買物をして、店で釣錢を加奈陀の金で渡す、其の方が高い金です。ところが、こんなけちな金は要らないと言つて受取らな

い、これが亞米利加人の心理です。ところが加奈陀人の方では、何だ、此の成上り者と言ふ、「アイ・ヘートアメリカン」と言ふ、斯ういふ米加の關係、血は水より濃しと申しますが、兄弟も喧嘩する、ところが今年の八月十八日「ルーズヴェルト」大統領は加奈陀の「クインス」大學で一場の演説を試みたが、それは、米加の關係に劃期的意義のある演説であつたと思ひます。他の帝國主義國家に依つて加奈陀が侵略されるやうな場合には、亞米利加合衆國は袖手傍觀する譯には行かないといふ演説であつた。それに對して、加奈陀聯邦の總理大臣である「キング」がそれに答へて、加奈陀は自己の領土を防衛する、而して加奈陀をして亞米利加に對する帝國主義國家の進撃根據地とすることを絶対に許さないと言つて居ります。さうして、加奈陀のあらゆる新聞は、筆を揃へて二人の演説を讃嘆して居ります。さうして、加奈陀と亞米利加の間には、五つの大きな湖と「セントローレンス」といふ河が流れて居る。何しろ、國境の一部が水で成つて居る關係で、其の水路の利用問題は永い間の面倒な交渉であつたが、其の問題がどうやら最近片付いて「セントローレンス」河の上に兩國を繋ぐ橋が架かつた、實は大統領は其の橋の開通式に行つたのであります。此の橋は、二つの國の領土を繋いだのみならず、二つの國の人の心持をも繋いだのではないかと思はれるのであります。斯くして亞米利加は、全米に於て、亞米利加と親善關係を持たない、又、更に進んで、政治的・軍事的・經濟的・文化的に之を一つの單一的な亞米利加に作り上げる運動に参加しない國は一つもないといふ所まで漕ぎ付けて居るのであります。此の亞米利加の今日までに成し遂げつつある所の仕事、即ち國家よりもう一つ大きな人類の

團體、此の傾向は、正に、私が最初に申上げた分散から統一への先驅を成して居るものと思ふのであります。「ハル」の政策は、他の亞細亞或は歐羅巴に對してまさしく先鞭をつけたものであると思ひます。

六、平天下の理想

古い昔の話ではありますが、孟子が梁の國に行かれて道を説かれたことがあります。當時の支那、支那人にとつて世界であります。當時は既に七箇國になつて居つた、それより以前には小さな國があつて、隣國で咆へる犬の聲、雞の聲が聞えたといふからには、村みたやうな小つぼけな國も澤山あつたが、それが段々合併されて小數の大國對立時代に入つてゐた。ところで孟子は天下に遊説されつつ梁の國に行つた。梁の王さんは惠王と云つて、おつちよちよいの男であつたと孟子も申されてゐますが、學者が來たといふので、野心満々、天下を統一しようといふ考で居つた彼氏は孟子に向つて質問した。「天下惡クニカ定マラム」、天下は一體どこに行くのかといふ質問、さうすると、あなたが統一なさるのでと言つて呉れると豫期した處へ、「一ニ定マラム」、天下は一つになります。「孰カ能ク之ヲ一ニセム」、それならば誰が天下を統一するかと言つた。惠王、あなたでございませうと言ふかと思ひきや、「人ヲ殺スヲ嗜マザル者能ク之ヲ一ニセム」と來た。無暗に人を殺さない人でなければ天下は統一出来ませぬ。そこでぐつと癩に障つたと見へて、「孰カ能ク之ニ與セム」、お前のやうな説に誰が賛成する者かと言つた。すると孟子は「天下之ニ與セザルナシ」、天下の人

皆私の意見に賛成しませうと言つて物別れになつたのであります。これは今から二千三百年前の話ありますが、當時の支那は、國といふ存在の上に天下といふ存在を考へて居つた。そこで、孔子の道も修身・齊家・治國・平天下であつた、「天下」と云ふ思想は支那の政治學の上に容認され、やがて、政治の實際に具現することを約束されたのであります。

當時の天下といふ存在に較べて見ると、今日の世界は、觀念的に申しますと、誠に狭いものだと思ひます。今日のやうに日支關係がなると、どんどん飛行機で、居眠りして居る間に、上海へも廣東へも北京へも飛べる、誠に今日の世界は狭い、機械文明の發達に依つて世界は狭くなり、又其の地方性は段々稀薄になります。村が段々大きくなつて國となり、其の國と國とが相對峙して居る、之を理窟の上から推して考へても、實際の傾向から見ても、世界の將來は必ず一つになると私は思ひます。世界は統一されると思ひます。其の統一をやりたいといふ氣持が人間にあればこそ、最初申上げたやうに、國際聯盟も出來たのである、唯、心掛けが悪かつた、其の統一の道を、聯盟のやうに一氣に中央集權的な機構にしないで、實際の狀況に沿つた、さうして人類の理想とする線にも沿つた統一形態への徑路が、今日、歐米にも亞細亞にも各方面に生れかけてゐる。その一つとして只今申上げた亞米利加政治體制とても申しませうか、それが逸早く出來上らんとしつ

つあるのであります。

七、歐洲の新體制

(イ) 歐羅巴の本質

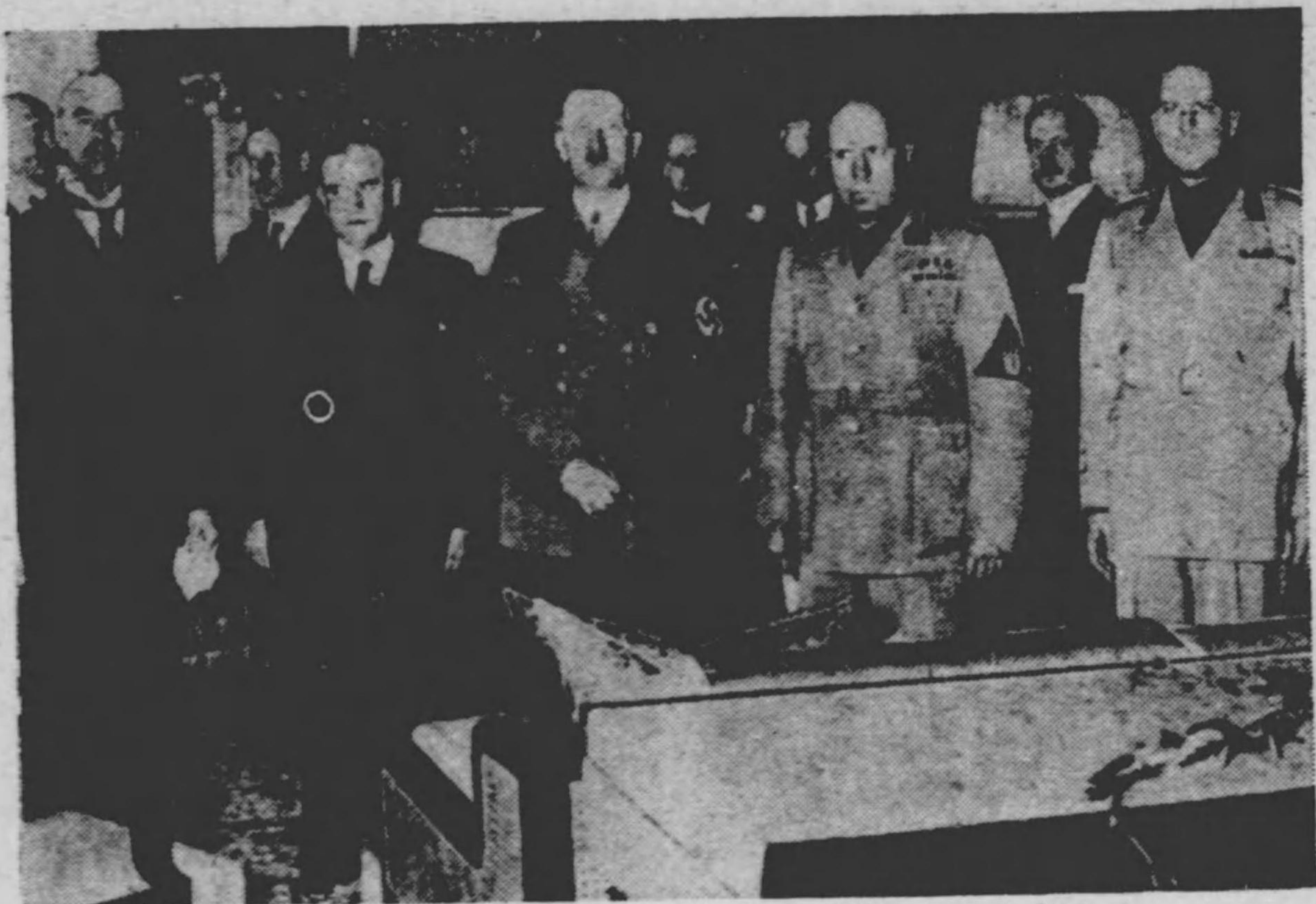
それでは、歐羅巴の方はどうなつて居るかと申しますと、歐羅巴には、中世時代のやうに、小さな國が幾つもあること皆様御承知の通り、さうして、何しろ慾の強い連中が集つて居る地帯でありますので、國と國との間の利害關係に依つて、離合集散誠に恒ないのであります。そこで、外交といふ點から申しますと、誠にせはしない一つの地帯であります。歐羅巴人は、元々野蠻人であるが、基督教に依つて精神文明を與へられそれから「サラセン」人が参りました、今日の歐羅巴の科學の素を教へた、此の二つの物に依つて精神的又物質的の文化の基を立て、次第に發達して參つて今日の歐羅巴となり、其の文化の力に依つて、東洋にどんどん入つて参り、東洋を征服して植民地を作り、之等の地方からあがる利益を歐羅巴に持つて行き、あの今日の燦爛たる物質文化を築き上げたのであります。何しろ雄大なる力を持つて居ることには間違ないのであります。

けれども、此の利益を中心として國と國との關係を律して行く結果、動もすれば、「バランス・オブ・パワー」即ち力と力の釣合だけで平和を維持して行かうとする、之だけでやつて行く所に、歐羅巴の弱味があり歐羅巴に住んでゐる人々の悩みがある譯であります。さうして、それが因となり、歐洲戦争といふ大喧嘩を

やつて、一千萬の人を殺し數千萬を片輪にした、大した喧嘩であります、さすが、其の後で、佛心、否、西洋のこととありますから基督教の云ふ愛の心を起したが、まだまだ悟りが聞けない爲にうまく行かない、さうして、國家と國家が鎬を削る、斯ういふ状態で最近まで參つて居ります間に、一つの新しい發生があつた、それは、獨逸と伊太利であります。所謂全體主義國家といふものの發生であります。此の全體主義の二つの國が出たといふことが、歐羅巴に新しい一つの時期を劃したのであります。

(ロ) 獨逸の新興

御承知の如く、獨逸の全體主義は、獨逸民族を打つて一丸とした國家を創る、第三國家を創つて行く、獨逸民族は先般併合された埃太利に六百五十萬、「チエッコ」の「ズデーテン」に三百五十萬、其の他「ルーマニア」にも波蘭にも「ハンガリー」にも、或は百萬近く、或は二三十萬の者が居ります。丁抹にも居り、「ソグイェト」にも居ります。之等の獨逸人を全部集めて、さうして獨逸人國家を創つて行きたい、一民族、一國家に創つて行きたい、これが獨逸人の切なる希望であり、それ故に「ヒットラー」は生命を賭して今闘つて居る。「ヒットラー」は、此の大業を完成する爲には、家庭を持つては兩方をうまくやつては行けないといふので、獨身で居るらしいのであります。而して此の「ヒットラー」を嚮導者、指導者として、一指導者、一家族一國家、これを標語にして今日の發展を畫して居る譯であります。それに依つて、今年の二月に始まつて最近までに、埃太利と「ズデーテン」を併合したのであります。歐羅巴の外交界を見ると誠に大嵐であります。



昭和十三年九月三十日ミュンヘン四國協定成立の際 歐洲四巨頭の握手 前列左より英國首相チエンペレン氏・フランス首相ダラディエ氏・ドイツ ヒトラー-總統・伊太利 ムツソリーニ首相

此の獨逸の發展は、更に東へ東へと伸びて、波蘭も近く獨逸の陣營に入るでせう、「ハンガリー」は固よりであります。「ハンガリー」は、物資の三分の二は獨逸に輸出しなければならぬ、三分の二を買つて貰ふお客様に楯つく譯には行かない、「バルチック」にあります小さな山岳地帯の「ラトヴィア」、これも、今日參つた電報で見ると、もう獨逸には叶はぬと兜を脱いで居る。さうして、近く、攻守同盟、不侵略同盟といふやうなものが逐次締結されて來ることになります。「ソヴィエト」のの不侵略條約を廢棄せよ、農産物は全部獨逸に輸出しなければならぬ、さうして獨逸の機械を買ふ、今年の暮までにどつちか厭應の返事をしろといふのが其の交渉振であります。此の「ラトヴィア」も何れ入れることとありませう。續いて「エストニア」「ルテニア」も同じ運命に落ちてゆきませう。「ルーマニア」と

いふ國は石油の多い國で、これも石油を持つのが身の因果で、獨逸は必ずこれに着目する、さうして何とか關係が出来ると思ひます。

(ハ) 伊太利の新興

伊太利はどうかと申しますと、「ユーゴスラヴィア」はもう自己の陣營に引入れて居り、更に、地中海を隔てて亞弗利加の北にある地帯を逐次手に入れて行くのでありませう。「アビシニア」が入つたことは皆様御承知の通り、之に依つて「スエズ」(連河の反對の出口は伊太利がぐつと抑へてしまふ。獨逸と伊太利の間にはお前さんは東に行け、俺は東南に行くからと云つたやうな一つの共同作業が起つて居る、それが何で出來たかと言へば、「ヒットラー」といふ一人の人間と「ムツソリニ」といふ一人の人間、此の二人の人間の魂の協同に依つて出來て居るのであります。獨逸は、只今申したやうに、國家の目標をはつきり掲げて、東へ東へと進んで居る、政策的に見て西へ進むことは危険である。そこで、「アルサス・ローレン」は永久に佛蘭西へ差上げます、又、「ライン」を西へは絶対に出ませぬ、「ライン」は英吉利にとつては大陸に於ける國境ださうであるから、之から西へは出ませぬといふ方針を決めて居る。又、伊太利は昔の羅馬帝國を再現すると云つて動いて居る。此の二人の結合には先づ搖ぎがないと見て宜しい。一九三四年「ヒットラー」が「ムツソリニ」を「ヴェニス」の町に訪問した折、「ムツソリニ」から「ヒットラー」に、伊太利の問題で一つ妥協しようぢやないか、お前さんの方にしても埃太利が大事かも知れないが私の方も非常に大事だ、妥協しようぢやないかと

いふ話を持たんだ、すると「ヒットラー」は一言の下に之を断つて居る、私は獨逸と奧太利の境の小さな村で生れたのだ、私の一生涯の願は獨逸人を打つて一丸とする國家を創ることだ、こればかりは何としても話に乗る譯には行かないと断つて居る。そこで「ムツソリニ」は、「ヒットラー」といふ男は政治の分らぬ男だと言つた。政治は妥協なりといふ言葉もありますが、さういふ見地から言へば、成程政治が分らぬと言つて宜しいのでありませう。其の「ヒットラー」と「ムツソリニ」の間にどういふ話が出来たか知らぬが、此の三月十三日に獨逸が奧太利を併合した時には、「ムツソリニ」は全力を擧げて之を支持して居ります。

伊太利の新聞は筆を揃へて獨逸に聲援を送つて居る。其の間の事情は分りませぬが、深い約束が出来て居るものと思はれる。又、先般、「ズデーテン」を併合致します時に、「ムツソリニ」は二度大きな演説を致して居ります。其の中で、此の二人のことを、心と心との繋さだと云ふ風に申して居るが、これは單なる形容詞ではないと思ひます。即ち、此の二つの國が結合して、歐洲戦争後に出来た歐羅巴の一つの體制、即ち「ヴェルサイユ」體制を變へて行く運動に従事して居る。不合理だ、どうしても變へて行かなければならぬと云ふ考で、只今申したような形勢に依つて、歐羅巴は、中部に於て、北から南へばさりと半分に切断された形になつて居る。西の歐羅巴から東の歐羅巴に連絡しようとしても最早容易くは出来ないやうになつてゐるのであります。

八、英佛の態度

「ヴェルサイユ」條約に依つて定まつた時の國際情勢を見ると、聯合側は獨逸を包圍して居つた。さうして包圍陣に加つて居る東の方の國々は佛蘭西の指導の下に立つた、當時、佛蘭西は、それ等の國々に御金を貸してやる、物を買つてやると云ふ風で、此の若い成立當初の國々に多分の力を添へた、其の中に、國として一本立が出来るやうになつて、御金は借りなくても宜い、又、關稅が高くなつて品物も佛國へ這入らなくなつたと云ふ譯で、次第に此の關係は稀薄になつた、そこへ持つて來て獨逸が強くなり、これが亦其の關係を稀薄にした、併ながら、兎に角、此の佛蘭西を中心として一つの攻守同盟的な聯繫はつい昨今まであつたのであります、これが殆んど破れてしまつた。英吉利は、佛蘭西に力を添へて、歐羅巴の勢力均衡維持と云ふ政策を執つた。其の英吉利では、「イーデン」が退却して理想外交が退き、「チエンパレン」が出て實際外交が出て來た、併し如何なる名前が付かうと、そこに一貫して居るものは何かと言へば、歐羅巴に於ける勢力の釣合を求める、これが英吉利外交の基調であります。所が、只今申したやうに、佛蘭西に取つては突支捧が無くなつた、其の上佛蘭西が最も頼りとして居つた「ソヴィエト」は「トハチエフスキー」以下の元帥大將を「ズバリ々々」とやつ付けて、軍の肅清工作をやり、「ソヴィエト」の軍隊内には一等大將、二等大將、三等大將と云ふのがあり、其の中には阿呆大將も澤山居り、「スターリン」が其お山の大将であるが、一等大將七

割までは付けられ、將校連中も約三分の一ほどは何處へ行つたか分らなくなつた。こんなことでは蘇聯は何かあらうとも立つ事は出来ない、加之、不安に襲はれてゐる「ソヴイェト」の軍隊は、精神的に見て非常に衰弱して居る、其の上相當に出来上つたと思つてゐた重工業、これがどうも思つた程ではない、そんなことから佛蘭西は「ソヴイェト」と次第に縁が薄くなつた。只今佛蘭西の内閣を組織して居る「ダラヂエ」此の人は急進社会黨の右翼であります。佛蘭西と云ふ國は選挙があると其の結果は左で、時が経つに従つて右になると云ふ傾向があります。「ダラヂエ」は左の方にも相當氣を兼ねて、それ等の意向を汲んで舉國一致體制を執つて居るが、「ソヴイェト」とは合はないで、英吉利と親密にして行かうと云ふ方針である。そんなことで、佛蘭西と「ソヴイェト」の關係は、親密さが減退して居り、只今では、佛蘭西の外交は英吉利と手を繋いで、虫を押へて獨伊と喧嘩しないやうに、さうして來るべき時を待たうと云ふ考へ、英吉利とても亦さうであります。英佛の空軍を一諸にしても獨逸の空軍には勝てない、これが今度の「ミュンヘン」會議の決定的力であつた。「チェンバレン」と云ふ人は誠に見上げた外交をやつて居ります。敗けて勝つと云ふ外交をやつて居ると思ひます。日本では、外交と言へば強い一點張りが評判が好いようであります、軟弱外交も亦必要であります。軟弱なるべき時には軟弱、強硬なるべき時には強硬、時に應じ變に處して其の態度を決める、これが外交の要諦だと思ひます。「チェンバレン」の軟弱外交、誠に時の宜しきに合つて居ると思ひます。あと二三年致しますと英吉利は大艦隊が出来ます。又、亞米利加から買つて居る飛行機、自分の國で製造する飛行

機で大空軍も出来る、さうなつたら、地中海で伊太利に我儘はさせないと云ふ考で「ドンドン」軍擴をやつて居る、これが出来るまでの辛抱と云ふのが、「ミュンヘン」會議に於ける英吉利の外交を通して見た「チェンバレン」の外交であります。そこで、「チェンバレン」が屈辱外交をやつて歸りますと、流石は英吉利人、國民を擧げて大歡迎をやつて居る、三度、大陸に飛び、三度、飛行機で歸つて來る、さうして、其の飛行機に於て皇帝が優渥なるお言葉を與へられて居る、これが英吉利人の外交常識であります。兎に角英吉利は來るべき時期を待つて居るが、今此の獨伊の樞軸にはどうにも楯つくことが出来ないといふ情勢になつて居る。此の「ミュンヘン」會議に於ける「チェンバレン」の讓歩、これは、固より、力と力との釣合といふことに大きな關係を持つて居りませうがもう一つ考へなければならぬことは何であるか、即ち獨逸の獨逸人を打つて一丸としたいとの氣持には無理がないといふことなのであります。無理のないことをやれば、敵の方でも無理がないと思ふ、自分が無理だと思つてやれば、相手も無理だと思ふ、此の無理がないといふことが大きな力だと思ふのであります。自覺して居ないかは知れぬが、兎に角分裂から統一へと云つた大きな動きが「ヒットラー」に命令してやらせて居るものだと考へて宜いのであります。歐羅巴に於ても、人種或は文明系統の線に沿つた統一が次第に行はれつつあり、此の大勢に乗つた獨逸の要求と知つて英吉利は容認したものと考へて宜いと思ふのであります。

九、提唱せられたる歐羅巴聯盟

二六

そこで、來るべき次の時代に於きましては、獨伊の全體主義國家を中軸とした全體主義的國家群と、英吉利佛蘭西の民主主義的國家の結合を中心とした民主主義的國家群の二つが出来るだらうと思ひます。さて此の二つの群の間に何か起るか、恐らく戦争もあるでせう。幾多の外交交渉も起るでせう、けれども、結局するところは、一つの歐羅巴になると思はれる。それは何故かと申しますと、既に歐洲戦争直後に「クーデンホーフ」といふ人が歐羅巴聯盟を提唱して居ります。さうしてこれを妨ぐべき自然的理由は何等ないといふことを言つて居ります。「クーデンホーフ」は一個の理想家で實際の政治には大して携はつて居りませぬが、それから暫く經つて、佛蘭西の大政治家「アリスチード・ブリアン」が一九二九年、當時外務大臣をして居つたが、此の人が歐羅巴聯盟を提唱したのであります。色々やつて見たが、結局歐羅巴は聯盟にならなければ駄目だといふ結論に達したのであります。

佛蘭西の文明批評家で「アンドレ・ジグフリード」といふ人があります。「亞米利加ハ成長セリ」といふ立派な著書があつて、亞米利加の社會を評論して居りますが、其の人が「歐羅バノ危機」といふ本を書いた。それに依ると、亞米利加を見よ、亞米利加は合衆國だけでも東西三千哩の幅がある大陸であるが、其處には一つの税關もないではないか、歐羅巴を見ない、どれ程多くの關稅戰をやつて居ることか、それでは安い原

料を得られやう筈がない、又製品を有利に賣れる筈がない、大規模の産業を起せる筈がない、亞米利加は規格統一の國である、例へば、我々の着て居る襯衣、それを紐育の工場で一度に何萬枚か作つて亞米利加全土に配る、紐育で出來た物を桑港で着るといふ國、總てが大袈裟である。工費は高いかも知れぬが結局は安いこれが亞米利加といふ大きな領土を持つて居る利益である、だから亞米利加には叶はない、ところがもう一つの叶はないものが出來た、それは何かとへば亞細亞である。亞細亞とは何か。

それは日本だ、日本はこれまで粗製濫造の安い物を作るといふ香しからぬ評判を與へられて居つた、ところが實はさうではない、日本人の頭がどんどん進んで來た、進んだ頭で安い生活に甘んじ、安い勞賃で良い物を安く作つて來た、これは堪まつたものではないといふのが「ジグフリード」の見方でありませぬ。然らば歐羅巴はどうするか、そこに非常な悲觀がある、併しながら彼は歐羅巴人であるが故に自ら恐める言を爲して、歐羅巴は精巧品を作れば宜いと言つて居るが其の精巧品として、亞米利加にも出來、日本にも出來。さういふ譯で歐羅巴の弱點は何んだらう結局それは小さく國々が分れて居るからだといふことは、歐羅巴の有識者の間には誰にも肯定されてゐる事柄であります。斯ういふ譯で「ブリアン」は歐羅巴聯盟を提唱したのであります。多數の人の道理だと考へること以外に政治に實現すべき力はないと思ひます。何時の時にかそれが勝を占めるのであります。それ故に、歐羅巴にも歐羅巴を打つて一丸とした一つの體制が出来るといふことを結論せざるを得ないのであります。

一〇、亞細亞新體制の原理と南州翁の遺教

二八

然らば亞細亞はどうなるか、亞細亞を翻つて見なければならぬのであります。岡倉天心が「亞細亞ハ一ナリ」と喝破した如く、亞細亞は一なりとの思想は古くより存在し、統一への努力も屢々なされたのでありますが、日本國體の根本原理からほとぼり出た力を以て起つたのは滿洲事變以後であります。

亞細亞の將來、日本の使命と云ふことに付て私の考を申上げる前に茲に皆様に御紹介する歴史上の逸話あります。それは西郷隆盛の征韓論の一節であります。

太政大臣な篤と聞いておいて下され、今の太政大臣な昔の太政大臣でなく、王政復古、明治維新の太政大臣ぞわす、日本を昔からの小日本で置くも、大神宮の御神勅の通り大小廣狹の各國を引寄せて、天孫のうしはき給ふ所とするも皆おはんの双肩にかかつて居り申すぞわす。

日本も此の儘では、何時迄も島國の日本の形體を脱することは出来申さぬ、今や好機會好都合ぞわすので歐羅巴の六倍もある亞細亞大陸に足を踏み入れて置きませんと後日大なる優患に遇ひますぞ、朝鮮と清國とはこけ威して決して恐るるに當り申さん、魯西亞は國民の耳目を外國にそらさんことを終始致し申さんでは自己の身體かあぶないぞわす。大兵を出して日本を征するなんちうことは、とても出来ませぬ。今おいどんが言ふ事をあきさやらんと後日此倍も未だ其の倍も骨が折れ申す。そしてどう骨折

つてもおいどんが今言ふことせんばならんとぞわす。

どうでもこうでも日本の神慮天職ぞわすけん、結局朝鮮を外垣として後に朝鮮を策源地とし申して、魯西亞と手を引き合ふこととなり申す。然し一度は戦争をしませんと、相手の事情も本當に呑み込みませんから、假令仲よくなり申しても皮相の同盟で誠意の同盟は出来ませんから、一寸の利害で直ぐくづれますぞ。此通りなり行くことは、此の隆盛が判断したることではなか、實は天祖の御神旨日本の國令が此通りぞわすから、いやでも遅かれ早かれ左様なり行きます。

おはんなおいどんより十二も年下じやけん、おいどんより後へ生き残りましようて、只今申した事はよう覺へちよつて下され。

私のこれから申さんとする處は、此の血を吐く程の想をされたであらうとは思はるる南州先生の以上の御意見に盡きて居ります。處が今次の日支事變、此の大戦争の目的はどこにあるかと誰に問ふて見てもどうもはつきりしないと云ふ、政府では國民精神總動員と言つてやつて居るが、さて其の總動員運動をやつて居る方々に聴いても分らないと言ふ。併し、それは、此の大きな運動の裡に潛んで居る一つの大きな力、それに依つて世界が動きつつある大きな力、それは一つの神といふ言葉を使つても宜しい、其の神から命ぜられて居る一つの絶對使命、それがはつきり讀めないからだと思ふ。此の大きな動きには、其の絶對命令があつて、日本と支那とは一つに成れ、成れない邪魔があつたら打壊して行け、其の障碍を除け、斯ういふ命令

があるのだと考へます。亞細亞に於ても、亞細亞を一つにした體制が出来なければならぬ。其の大勢に導かれて此の事變が起つて居るものと解釋すべきだと私は考へて居る。これは日本に授けられた一つの使命である。然らば其の使命を日本は負ふに足るや否や、これは我々自分の問題となつて來るのであつて、深く考へて見る必要があると思ふのであります。

一一、日本精神の原理

此の頃、世間では、日本精神と言ふと、「インテリ」階級では、其言葉が大分鼻について來たと見えて、あれは右翼だと簡単に片付け耳を塞ぐ傾向がある、これは非認出來ない事實だと思ひます。

又、此の言葉を悪用して居る者も相當あると思はれます。併しながら我々は此の日本精神といふものを淡々たる氣持で素直に見て行くことが必要だと思ふ。そこに我々の生命の源泉を發見することが出来るのである。神代のことを一つの神話としてだけ見ないで、あの中に含まれて居る尊い教を見出さなければならぬと思ふのであります。

明治天皇の御製に

わがしれる野にも山にもしげらせよ

神ながらなる道をしへぐさ

とあります。

自分の治めて居る土地の偶々まで此神ながらの道を明かにして教へて呉れよとの御思召であります。此の神ながらの道と言ふと、或る一部の人は、直ぐに、洋髪を結つてはいけない、日本髷でなければならぬと言ふ、然し神ながらの道とは、物事は只舊い形式に還す、即ち死んでしまつたものを生かす、さういふものではありません、それは決してほんとに日本精神ではないのであるが、斯ういふ邪道がまだ相當に跋扈してゐる。神ながらの道は、譬へて言へば、一本の眞白な絹糸のやうに綿々として絶ゆることなく今日に傳つて居り其の創めも今の所もこれから先きも總て同じもの、それには新古論なき大きな生命である、これが日本精神であります。之を古典に求むれば、古典の中に生きて居る精神である、古典の中にあらざる數々の出來事は單なる過去の出來事ではない、其の中に脈々として生動する生命、それが日本精神であります。それがどんなものであるかは現し神たる我々の胸に聽けば判る。古神道と云ひ惟神道と云ふ、それに相違はありませんが之を現實に生かして行く事が日本精神であり、其の意味に於ては、新々神道と云つても亦同意義であります。

私は外國人に日本を説明致します爲に若干の苦勞を致して居ります。日本の神話の中に在る尊い教、それを説いてもなかなか分らない、ごうしたら宜いかと色々苦しんだ結果、近頃は新聞の社會記事を拾つて其の儘供給して居ります。教育を受けた所謂「インテリ」ではなく、教育に恵まれない我々同胞の中にどれ程美しい精神が生き々と動いて居るか、澤山の美しい行爲が新聞に出て居る、それを纏めて送つて居りますが、此の

方が遙に雄辯な説明になるのであります。我々は有つて居るが故に其の尊さを知らないものがあるのです。支那の孔孟の教の基をなして居るものは惻隱の情である、氣の毒だ可哀相だ見ては居られないといふ氣持、それが人助けをしようといふ氣持になり、又惡を叩き伏せる氣持になり、修身、齊家、治國、平天下といふ所まで發展するのでありますが、其の惻隱の情が支那では珍らしいが、日本ではざらにある。辜鴻銘といふ支那近代の學者がありました、其の人は、日本へ來て、惻隱の情の行きわたつてゐるのを見て非常に感心した、殊に日本の婦人の間に婦徳としてそれが現はれて居るのに感心した。此の美しい氣持、濯ぎ上げた氣持「褻」に依て穢れを拂つた氣持、さうして他と愛を以て結付いて行き、一刻も休まずに創造又創造と命を新にして行く力、これが日本精神であります。さうして、此の精神の動く所には一つの中心があり、其の中心から絶対に離れない、難しく申せば宇宙に充滿して居る、唯漫然と虚空にあるのぢやない、一切空ではない一切充されて、さうしてそこに中心がある、其の中心を我々先祖は天御中主神として祀つて居る。其の精神が發露して色々な形を顯現する、その役目に産靈の神様がおいでになる、それを其の儘我々の祖先が荒魂と和魂の二つの作用で實行に移した爲に次第々々に今日の日本の文明、日本の領土、日本の社會、日本の歴史が創られて來た譯であつて、今日我々がそれを多分に分つて居ればこそ、此の大日本帝國が出來たのであります。御一新前、幕府の御老中が、近頃異國に於ては或て造つた船が出來ましたといふ報告を受けたところ、馬鹿なことを申すな、鐵が水の上に浮くものか、左様なことを申すのは、「キリスト・バテレン」であらうと

言つて牢に入れたといふ笑話がある。左様な程度の科学知識しか分つて居なかつた日本が今日はどうでありませう、一隻の新式汽船すらなかつた日本がこれ程の海運國になつた。人間の數は、明治の初年には三千二百萬しかなかつたが、今日では一億に近い、生きて居る人間は食はなければならぬが、他所から食料を輸入して居るかといふと、輸入しないで自分の所で作つて居る、今日迄の處、米の生産高の増加率は、人間の殖へ方よりも少し進んで居ります。さうして、日本の經濟力は大體佛蘭西と伊太利の中間にあります。天然資源のない日本が、貧乏なりし日本が、今日までになつて來て居る、これ程の大きな力はないと思ひます。それが何故出來たかといふと、皆、日本精神が仕事の上に現はれて來、人間と人間との間の結付き、人間の間につた感激、それが今日を成したのであります。尤も、その間に、綺麗なことばかりではない。澤山の醜いこと、排撃すべきこと、褻ぎしなければならぬことは澤山ありますが、其の中を切抜けて來た。又今日と雖も、多くの褻ぎを爲すべき理由がありますが兎に角今日まで來た。其の氣持を以て今の時局を考へて見るならば、御先祖のお示しになつた通りをやれば宜い譯である。さうすればそこに世界の氣勢が命じて居る日本の使命といふものは自ら達成される譯であります。難しく申せば、我々の肇國以來有つて居ります精神を、今日内に展開し、更に外に之を今日の日支關係に展開さすといふことが、此の時局解決の鍵だと思ふのであります。

一二、支那事變解決の道

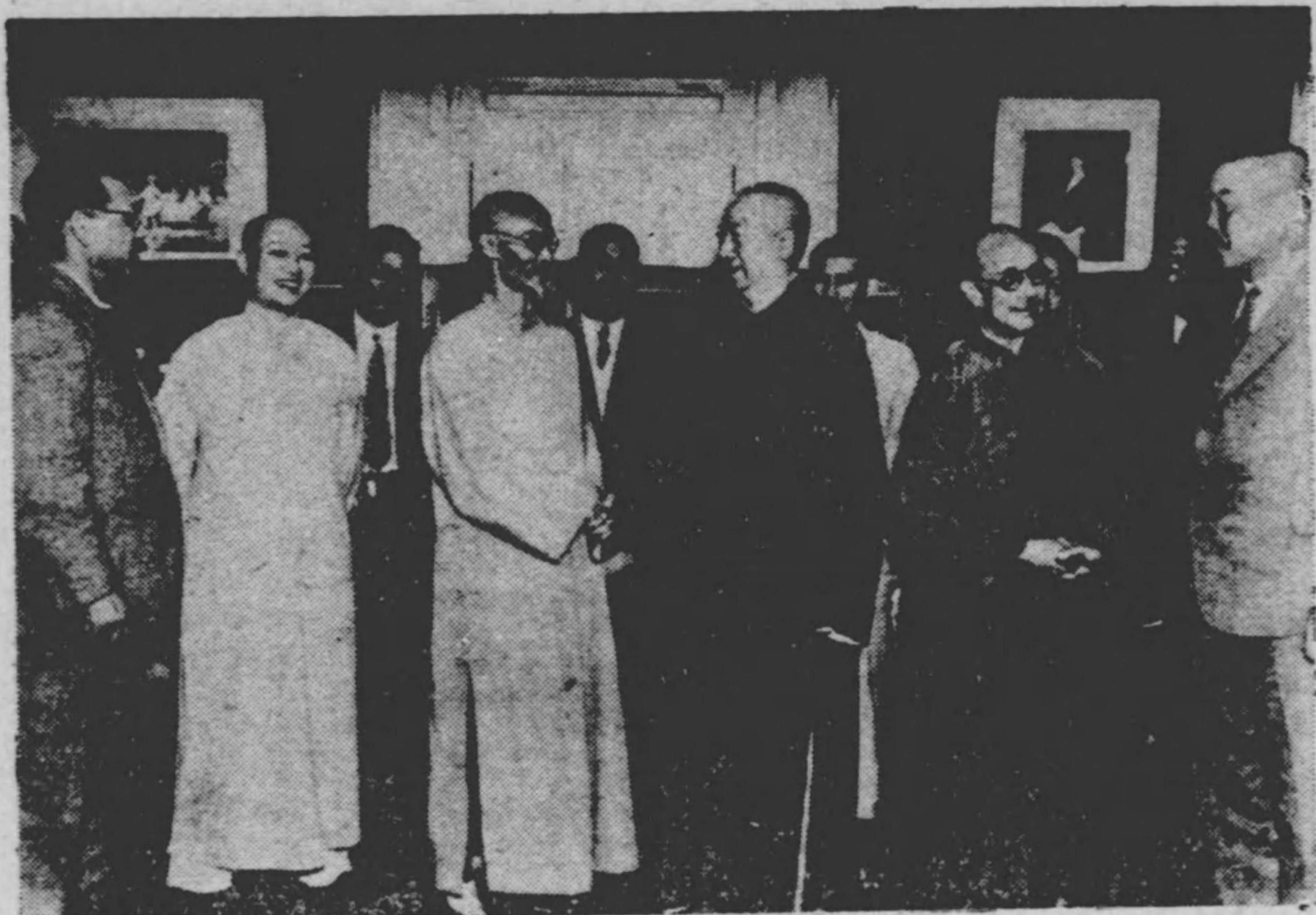
三四

又、平たく観ますと、日本が支那と關係を持つてから約千六百年、其の間に喧嘩をしない時期は非常に長かつた。即ち日清戦争まで續いた譯である。十九世紀の末までは日本は支那の文化を日本精神に依つて取扱つて、それが別個の日本文明となつた、佛敎も入つた、さういふ關係で餘り喧嘩はして居りませぬ。ところが日清戦争の後、日清通商條約といふ歐羅巴流の條約が出来た、支那が損をして日本が得をするといふ條約である。支那の若い者から言へば實に遺憾千萬である。それから今日までを反省して見ると、日本にも相當の無理があると思ひます。何分、歐米勢力の亞細亞侵入に對抗して、日本を護り、亞細亞を防衛する爲、事情やむなかりし處も多分にあるけれども、支那の青年達の言ふ所にも虚心に耳を傾けなければならぬ所があるとと思ふ。之等の點はよく反省して、清算すべきものは清算して、さうしてさばさばした氣持、支那を抱き込んで行くといふ氣持になつて、さうして、初めて、此の時局解決の準備が本當に出来ると思ふのであります。ここにも亦

明治天皇の有りがたい御製。

おのづから仇の心も靡くまで

誠の道をよめや國民



昭和十三年九月二十二日北京勤政殿に於ける中華民國政府聯合委員會の成立前列右から三人目より維新政府行政院長梁鴻志氏臨時政府教育總長湯爾和氏・維新政府内政部長陳群氏

と御座います。深く服膺すべき大御心ではありませんか。扱て、それが現實の政策としてどういふ風になつて来るか、これは相手のあることで、又最初に申しましたやうに、第三國の關係もあり、それ等から種々形を整へて参りませうが、其の基本に於て、新しき日本を完成する爲に、古い日本を支那と一つにしてしまつて新しい日本を創る斯う云へばとて併合すると云ふのではありません。其の新しい日本と古い日本とは別の物ではないといふ點から見れば同じ物である、別の物だといふ點から見れば別の物だ、此處に水がある、酸素と水素を合せて水が出来る。水の中には酸素もあり水素もあると言へばあり、なくなつたと観ずればない。形になじまず斷々ざる精神に依つて拘泥なく偏倚なく縦横自在、融通無碍に、さうして中心を離れない産靈の作用、これを日支關係に持つて行くといふ

決心が國民に出来るといふ時に、初めて解決の基礎が立つのだと私は考へるのであります。

一三、平等互尊の原則

日本の大陸指導には毫も征服の意欲はなく、支那が均しく新亞細亞體制の完全なる一環たらんことこそ日本の切なる願であります。平等と併存、主權領土權の互尊の原則の下に政治的單一化、經濟的單一化及び文化的單一化を終局の目標とする三つの路線に沿つて着々と諸般の具體的政策を樹て旺に經綸を行ひ提携より連帶へ連帶より融合へと進展を遂げ遂に併存國家の上に大同大和の亞細亞體制を完成することこそ日本の唯一の願であります。

尤も支那人の要求する平等互尊の關係といふのも形式的のもので、即ち支那の民族的存在乃至獨立國家としての存在を無視せられては困ると云ふ意味であると考へらるるのであります。元來平等とは人間が與へた價値の觀念であつて決して自然的の存在ではない、例へば軍隊に於て一兵卒として入營すれば其個人の本質如何に拘らず齊しく一兵卒として價値を與へらるるに過ぎないのであつて、其意味に於て平等である。然し個々の兵の間の交渉は實質が之を決定するのである。所謂平等觀とは價値の間に性質上の相違の無いことを意味するのでありまして、力又は程度上の差別觀とは兩立するのであります。此邊を胸に收めて今私は平等關係といふことを提唱致したいと思ふのでありますから此の意義に於て御解釋を願ひたいと存じます。

支那と日本とは、文明の系統から申すと同一系統に屬するが、現在支那に無いものを我々は多分に有つて居り、又今後支那より採入なければならぬのも多分にありませうが、兎に角、文明系統から申せば兄弟である、其の兄弟の關係にあるものが一つに結んで、分裂から統合へと行くのは今日の當然の道である。其の道は或は政治的に、文化的に、經濟的に幾多の道がありませうが、二つの國を一緒にしてそれを融合化して行く、此の融合運動といふものが我々の心構への上に行はれて來るとき、初めて、筋の通つた具體的政策が夫れから夫れへと樹立され、日本の極東に於ける大結合運動の礎石である日支關係の調整完了といふこととなるのだらうと思ふのであります。世間では、帝國主義と云ふ言葉が何かこわいものゝやうに思つてゐる人が少くない。そこで日本の大陸運動を指して外國人が日本帝國主義進出と云ふと直ぐに心配を切める、心配御無用、帝國主義もこんな處から出發するなら至極結構であります。歐米諸國に帝國主義の模範を示すのも愉快ではありませんか。

結 び

彼上の如く、歐洲及「アメリカ」大陸が、各此新體制の結成に向ひつつあり、幾十年の後になるかは素より推測も出来ませんが、他日之が略出來上るとすれば、必然的に、此兩體制と亞細亞との關係と云ふ問題が起つて來るものと觀なければなりません。其時に於て若し此二大體制と對立するだけの亞細亞體制が樹立され

てゐなければ、夫れは、亞細亞の滅亡であります。亞細亞なくして亞細亞の理想が實現する譯はありません。今次支那事變の意義は、此意味に於て把握されないでは、到底、事變の解決の眞髓に徹することは不可能であると思ひます。

我々日本人は、今當に亞細亞新體制への巨大なる一步を着けて居ります。固より其前途は多艱多難、神武肇國以來の一大試練であります。然し、此試練に耐へ、此大業に成就する宏大なる氣宇と不撓不屈の精神がないやうでは、今次事變の解決すらも覺束ないものと斷言して憚らないのであります。此新しき亞細亞體制の生れ出でたとき、此を率ひて歐洲の二大體制に應待するものは我日本であります。亞細亞對歐洲、「アメリカ」との關係を如何にすべきかは、今日、既に、我々日本國民總てに課せられた大きな課題であります。之が經綸の途は多々あるのでありませうけれども、其の根本をなすもの實に、「ムスビ」の心、八紘一宇の日本精神であり、此千古不滅の大精神を宇内に發揚し、世界をして齊しく仰望せしめることは、日本國民の大理想、大使命であると信ずるものであります。御靜聽を感謝致します。

「パンフレット」讀まれての感想、及び事變の將來に就いて建設案、其他の御意見を書いて本部宛に御送り下さる。

應答欄

切.....取.....線.....

住所氏名

東京市小石川區水道端町二ノ六四

青年日本運動御中

391
188

昭和十三年十二月二十五日印刷
昭和十四年一月一日發行

(非賣品)

發行人 兒玉譽士夫

東京市神田區西神田二ノ六

印刷所 白鳳社印刷部

東京市小石川區水道端町二ノ六四

發行所 青年日本運動

